

インフルエンザワクチン説明書 H28-29 第1版 やぐち内科クリニック

※H28年10月3日(月)～H29年1月31日(火)まで(おすすめは12月末までに接種完了)

※1回3000円(乳児6ヶ月～成人共通、税込) ※予約不要・予約不可(順番予約は可)

※当院ID番号をお持ちの方は順番予約システムがご利用になれます。(QRコード→)

携帯・パソコンからは <http://naika.atat.jp> 携帯・一般電話から TEL1860-345-8080-70

※ガム、アメなどは口から出してから診察室にお入りください。(誤嚥の可能性があり危険です。)

※予約診療ダウンロードは <http://naika.ac> から。(又は「やぐち内科 船橋」で検索。「やぐち」は“ひらがな”)



※体調(具合)の悪い方は接種できません。予診票に「今日、普段と違って体の具合が悪い」旨を書かれている方には接種していません。ワクチン接種は体調の良い時に行ってください。(カゼの初期などの体調不良時に他院で接種可と言われても当院では不可です。診察・相談されても回答は不変です。)
※予診票に体調のことを記載せず診察時にはじめて「具合が悪い」旨を申し出られた場合、および子どもが嫌がる等の自己都合の場合は接種が中止となっても規定の診察料を頂きますのでご注意ください。
※接種後30分は特に体調の変化に気をつけて下さい。また、接種後24時間は副反応の出現に注意してください。…副反応の項を必ずお読みください。

本人(又は保護者)の同意があれば接種可能…「カゼはだいたい良くなった」「普段から鼻炎があり鼻水が多い」「前から少しだけセキが出る」等の軽い症状はあるものの体調は良好な方。高血圧や高脂血症などの慢性疾患で内服中の方。急性期を過ぎたケガ。(但し心配な場合は接種を控えてください。)

◆◆◆ インフルエンザワクチンを接種できない方 ◆◆◆

普段と違って「昨晩からセキが出る」「今朝からのどが痛い」「昨日から黄色い鼻水が出る」等のカゼの初期と思われる方。体調が悪い方。ある一定の確率で起こり得る副反応の出現が容認できない方。ワクチン接種を希望されない方。明らかな発熱(37.5℃以上)を呈している方。重篤な急性疾患にかかっている方。明らかに気管支喘息発作をおこしている方。ワクチンでアレルギー反応をおこしたことがある方。重度免疫不全の方。けいれん発作をおこしている方。その他、医師の判断で予防接種を行なうことが不適当な状態にある方。

◆◆◆ インフルエンザワクチン接種回数および間隔 ◆◆◆

・小児(0歳6ヶ月～12歳)は2回接種です。受験生も2回接種をおすすめします。接種間隔は2～4週間以上あけてください。接種間隔が4週以上経過しても効果に問題はありません。65歳以上は1回接種です。

年齢	1回接種量	接種回数
0歳6ヶ月～2歳	0.25mL	2回(2～4週間の間隔で)
3歳～12歳	0.5mL	2回(2～4週間の間隔で)
13歳以上	0.5mL	1回または2回(1～4週間の間隔で)

※高校生までは予診票下部に保護者のサイン(同意)が必要になります。小学生までは接種時に保護者同伴が必要です。

◆◆◆ (参考)インフルエンザワクチン接種間隔の例 ◆◆◆ ※大流行は毎年1月下旬～です!

- ①1回目を10月に接種 →2回目は4～8週間程度あけましょう。
- ②1回目を11月に接種 →2回目は2～4週間あけて、できれば4週間あけましょう。
- ③1回目を12月に接種 →2回目は2週間あけて早めにうちましょう。
- ④1回目を1月に接種 →2回目は2週間あけてすぐにうちましょう。

※1回接種の方は11月～12月におすすめています。

◆◆◆ インフルエンザとは ◆◆◆

インフルエンザは発熱、全身倦怠感、筋肉痛、のどの痛み、時に腹痛・嘔気などの症状がでるウイルス感染症です。インフルエンザウイルスは大きく分けるとA型、B型の二種類があります。さらにA型には香港型、ソ連型、H1N1型(新型)等の分類があります。流行期は毎冬で感染力は非常に強く、潜伏期は1～5日で、高熱は2～3日間(長い人は7日間程)続きます。多くの人は無治療でも1～2週間で軽快しますが、抵抗力の弱い方は重症化することがあります。いわゆる“カゼ”とは原因となるウイルスが異なり、全く違う病気です。

◆◆◆ インフルエンザワクチンについて ◆◆◆

本年度のインフルエンザワクチンにはA型2種類(H1N1型、H3N2型)、B型2種類(山形系統、ビクトリア系統)

のウイルス株が含まれています。※チメロサルフリーワクチンはH28年度の製造においてすべてのメーカーで行いません。これは九州のメーカーが震災で打撃を受けたため、他メーカーは製造に手間がかかるチメロサルフリーワクチンの製造を取りやめ、数量を確保する方針となったためです。

※当院では毎年インフルエンザワクチンは十分な量を確保しています。(予約無しでも接種可能です。)

◆◆◆ ワクチンの効果 ◆◆◆

ワクチンを接種することにより、インフルエンザウイルス感染症にかかりにくい、あるいはかかっても軽くすむ確率が高くなると言われています。それにより、インフルエンザによる重症化や死亡を予防する効果が期待されます。(ワクチン接種をしてもインフルエンザにかかる事はあります。)特に小児では抗体(抵抗力)が出来る確率が20~30%といわれており、成人より効果が劣る場合があるようです。ワクチンの効果持続は個人差がありますが接種後2週間より約4~5ヶ月間とされています。インフルエンザの流行は1月からと予想されるので、小児等は1回目を10月~11月に、2回目を11月~12月頃に接種ができるようおすすめしています。1回接種の方は11月~12月に接種をおすすめします。

◆◆◆ インフルエンザワクチン接種でみられる副反応 ◆◆◆

・多い副反応は注射部位の熱感、発赤、疼痛、しびれ、硬結、皮下出血です。ほとんどは3~7日程度の経過観察で治ります。まれに1ヶ月程度、接種部位の鈍痛が続くことがあります。但し、発赤が肘を越えて広がったり、ただれた場合は受診してください。

※注射部位が腫れやすい方、腫れた方は氷などで接種部位を冷やして下さい。(冷やし過ぎに注意)

・予防接種後に発熱、悪寒、発疹、頭痛、めまい、倦怠感、一過性の意識消失、リンパ節腫脹、嘔気・嘔吐、下痢、関節痛・筋肉痛などの症状が出るがありますが、通常2~3日で消失します。症状が強かったり、不安に感じたときは医師の診察を必ず受けて下さい。

・きわめてまれに接種後30分以内に呼吸困難、咳こみ、ぜんそく様発作(ヒューヒューゼイゼイ)、じんま疹が出現する事があります。これらの症状はショック、アナフィラキシー様症状と言われ、放置すると生命の危険性がありますので、直ちに医師または看護師に申し出てください。

・その他のまれな副反応:急性散在性脳脊髄炎、ギランバレー症候群、けいれん、肝障害、黄疸等。

・注射時に安静を保てない方(幼児など)は、まれに注射手技を失敗することがあります。

※尚、副反応による健康被害が生じた場合の救済については、健康被害を受けた人または家族が独立行政法人医薬品医療機器総合機構法に基づいて手続きを行うことになります。

[副反応とは?:ワクチン接種後ある一定期間内に起きたすべての有害事象をさします。まれな副反応の中にはワクチン接種がその原因であると科学的に証明されていないものも含まれます。]

◆◆◆ 妊婦・授乳婦へのインフルエンザワクチン接種 ◆◆◆

・当院では妊婦にも希望および承諾があれば接種を行っています。(最近では妊婦がインフルエンザにかかる例が多く、優先して接種すべきと考えられています。)・産婦人科診療ガイドライン産科編2014には「チメロサルを含んでいる製剤もその濃度は0.004~0.008mg/mlと極少量であり、胎児への影響はないとされている。懸念されていた自閉症との関連は最近否定された。したがって、チメロサル含有ワクチンを妊婦に投与しても差し支えない。」と記載されています。

・授乳婦へのワクチン接種は可能です。(ワクチン成分は乳児に影響ありません。)

◆◆◆ その他の注意事項 ◆◆◆

・当日の入浴は接種後30分以上経過すれば差し支えありませんが、接種部位を強くこすったりもんだりしないでください。また、接種当日は飲酒や過激なスポーツは控えてください。・生ワクチン接種後4週間はインフルエンザワクチンをうてません。生ワクチン以外のワクチンは1週間インフルエンザワクチンをうてません。・インフルエンザワクチン接種後1週間は他のワクチンをうてません。・「みずぼうそう」や「はしか」などにかかった後は1ヶ月の間をおいて接種してください。(かかった人と接触したものの、本人が発症していない場合は接種可能ですが、心配な場合は3~4週の間をあけてください。)・軽症の卵アレルギーや鶏肉アレルギーの人は、ほとんどの場合接種できますが、医師と良く相談して下さい。・他のワクチンと同時接種も可能です。

◆◆◆ インフルエンザにかかってしまったら ◆◆◆

ワクチンを接種したら絶対にインフルエンザにかからない、という事はありません。(ワクチンの接種目的は重症化を防ぐことにあります。)インフルエンザの症状がありましたら医療機関を受診してください。